

# 「入れ歯お治し達人」 全国歯科医 60人リスト

入れ歯が合わないだけで、  
要介護から寝たきりに

しおだ よしたか  
塩田芳享  
医療ジャーナリスト



「入れ歯の神様」の加藤氏

これから日本は「超高齢化社会」

を迎える。二〇二五年に約八百万人の「団塊の世代」が七十五歳以上となり、国民の五人に一人が後期高齢者となった。未曾有の超高齢化社会では解決すべき問題が山積しているが、歯科の分野で大きな未解決問題があることをご存じだろうか？

それは「入れ歯」である。

三千万人以上が使っている「入れ

歯」は、咬み合わせがうまくできず、適正な入れ歯を作ることである。

「たかが入れ歯で寝たきりに？」

大袈裟だと思いかもしれない。医療ジャーナリストの僕でさえ、最初はそう考えていた。しかし、そんな考えを一変させる出来事が目の前で起こったのだ。

九十歳（当時）と高齢ではあったが、全く元気だった母が、突然神秘的な顔で僕に泣き言を言った。

「ご飯を食べると入れ歯が外れて、うまく食事が出来ないんだよ」

歯医者に行けば入れ歯を治してもらえる、と僕は簡単に考えていた。母には長年通っている「かかりつけ歯科医」がいた。入れ歯の修理など、ある程度の歯科医師なら、誰でもできるものと思っていた。しかし、現実とは全く違っていた。

母に付き添って歯医者に行つて詳しく状況を説明し、修理をお願いし

高齢になると、それまで使ってい

た入れ歯が合わなくなってしまう。加齢で歯を失うと、その歯を支えていた「歯槽骨」が使われなくなるので、少しずつ痩せていき、歯茎がすり減った状態になるからだ。さらに、歯周病などの炎症や、骨粗しょう症がある場合には、この症状がより早く進むことが知られている。

このように、歯茎がすり減った状

況になると僕の請を充分に聞いた上で老歯科医師の発した返答は、全く予想外のものだった。

「残念ながら、おばあちゃんはまだ歳だから、合う入れ歯は作れないんですよ」

満足に食事ができなくなったことで、それまで元気だった母がどんどん憔悴していった。

「私は、このまま一生食べられないままなのかねえ？」

このままでは精神に異常をきたしてしまうか、「寝たきり」になってしまう。

だが、長年信頼する歯科医が無理だと断言するくらいだから、入れ歯を修理するのは、そう簡単ではあるまい。それなら誰に頼めばいいのか？ 幸い、仕事柄、歯科界に多くの知り合いがいた。そこでヒットしたのが「入れ歯の神様」として知られる加藤武彦氏だ。

れる加藤武彦氏だ。

歯が合わなくなってしまった。食事の最中に入れ歯が外れてしまい、噛むことができなくなるのだ。

体はまだ十分に元気なのに、「入れ歯が合わない」だけで食事ができなくなってしまう。食べられなくなると体はどんどん衰弱し、「要介護」となり、ついには「寝たきり」になってしまう。

この問題の解決策は、すり減った歯茎を補うため、入れ歯を厚くし、咬み合わせを調整することである。

加藤氏は五十年以上も入れ歯を作り続けており、誰もが認める入れ歯の大家である。絶対に無理だと言われた母の入れ歯を治してくれるとしたら、加藤氏をお願いして他にいないだろうと僕には思えた。

しかし、加藤氏は歯に衣着せぬ発言で歯科界では恐れられる存在。その上、七十五歳を超える高齢であり、三度も脳梗塞を患い、右手・右足にマヒが残る。その加藤氏が依頼を受けてくれるだろうか。僕は意を決して恐る恐るお願いしてみた。すると、意外にも二つ返事で快く応じてくれた。

「うまく修理できるかどうかは保証できないけど、やれるだけのことはやってみますよ」

半日で「噛める入れ歯」に修理